放流クロアワビの漁獲調査

小島　博・浜崎　晃・宮崎一誠

前年度に引き続いて，徳島県栽培漁業センター産クロアワビの漁獲調査を実施した。調査は前年と同じ由岐町阿部漁協で，同地先の漁獲クロアワビ，放流貝の混獲率，成長などを調べた。

1　方　　法

昭和59年7月10日から9月12日の間に阿部漁協に水揚げされたクロアワビを8回調査した。調査項目は前年同様[1]としたが，籠調査数については，解禁日（7月10日）には21籠，7月17日には17籠と漁期初めには多くし，7月24日以降の調査は前年同様とした。今年度の調査では昭和56年秋放流貝（殻長10～30mm，放流数10万個），57年春放流貝（殻長26～42mm，放流数1万個），57年秋放流貝（20mmサイズ3万個，30mmサイズ1.5万個）が再捕された。これらの放流貝の区別は貝殻に形成される年輪によって区別した。

2　結　　果

籠調査結果を表1に示した。調査した籠数は91籠で，総調査貝数は4,533個（728kg）であった。56年秋放流貝は293個，57年春放流貝は104個，57年秋放流貝は33個含まれていた。放流貝の混獲率は56年秋放流貝6.5％，57年春放流貝2.3％，57年秋放流貝0.7％であった。阿部地先の本年度のクロアワビ漁獲量は，24.6トンで，個数に換算すると153,000個となる。このうち，56年秋放流貝は9,945個，57年春放流貝，3,519個，57年秋放流貝1,071個と推定され，それぞれ回収率は9.9，35.2，2.4％となる。放流群別による調査日ごとの混獲率は表1に示した通り，いずれの放流貝にもその混獲率が漁期を追って減少する傾向を認めることができる。

表1　放流クロアワビの混獲調査（阿部漁協）

月　日	調査籠数	調査貝数	混獲率			
			56年秋	57年春	57年秋	放流貝合計
7月10日	21	1,100	11.0	4.3	1.2	16.5
7月17日	17	818	5.3	3.1	0.7	9.1
7月24日	10	488	4.3	0.8	0.8	5.9
8月6日	10	500	5.2	1.6	0.7	7.5
8月23日	10	466	6.6	0.2	0.6	7.4
8月28日	10	529	5.5	0.9	0.4	6.8
9月5日	6	279	1.7	1.7	0.7	4.1
9月12日	7	353	4.5	0.6	0.3	5.4

本年度の漁獲クロアワビの年齢組成を図1に示す。

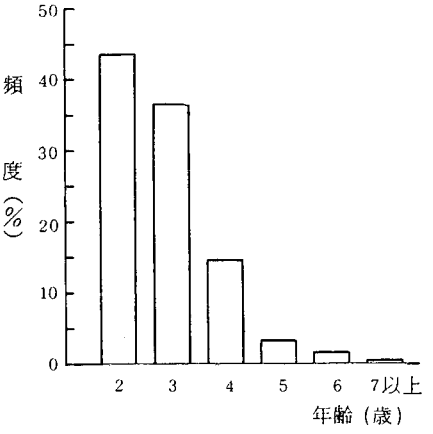

図1　漁獲クロアワビの年齢組成

昭和56年秋放流貝及び昭和57年春放流貝と同年齢の貝（昭和55年発生群）は37％であった。同一年齢群（3歳貝）のうち23.5％が放流貝であったと推定される。また，昭和58年秋放流貝と同年齢の貝（昭和56年発生群）は44％であった。2歳貝のうち1.6％が放流貝であったと推定される。

再捕貝の放流サイズと満年齢時及び再捕時の殻長を表2に示した。56年秋と56年春にそれぞれ放流したクロアワビはいずれも55年秋の種苗生産に由来する。57年秋放流貝は56年秋の種苗生産貝である。

表 2　再捕クロアワビの放流時，満年齢時及び再捕時の殻長

カッコ内は標準偏差
調査数は各群20個

放流時期	放流時	満 2 歳	満 3 歳	再捕時
5 6 年秋	18.3(±2.5)	47.4(±7.2)	75.7(±7.0)	98.4(±7.0)
5 7 年春	35.7(±3.0)	—	73.9(±8.5)	99.7(±8.0)
5 7 年秋	24.7(±2.7)	62.5(±5.4)		94.4(±4.4)

3　考　　察

56年秋放流クロアワビは本年漁期で放流から 2 年 9 カ月から 2 年11カ月を迎え，本格的に漁獲対象となった。この放流群は漁期始めに混獲率が11%に及び，漁期の進行と共に混獲率が減少し，終漁期には 5 %以下となった。こうした混獲率の減少傾向は他の放流群，(57 年春及び 57 年秋放流群)にも認められるが，放流が 1 m以浅であること，放流貝の移動－特に深所への移動－が小さいこと，操業場所が始め浅所に集中し，漁期の進行に伴ってやがて深所にまで拡大することによる。調査貝の 56 年秋放流群の混獲率 6.4%をもとにした再捕率 (回収率) は 9. 8 %と推定される。同様に他の放流群の再捕率は 57 年春放流群について 35.2%，57 年春について 2.4%とそれぞれ推定された。ここでの放流 3 群の再捕率を正確に推定するには前述の操業場所の変遷をはじめ諸種の補正を検討しなければならず，今後の課題の一つである。

57 年春に 36 mmサイズで放流したクロアワビの再捕率は 35 %程であった。56 年秋放流の15mmサイズ，20 mmサイズの再捕率に比べ明らかに高い。種苗放流量，放流貝の経済性など今後検討すべき資料が得られた点での意義は大きい。

放流効果の検討は，天然資源の動向と結びつけてする必要がある。来年度も放流クロアワビの混獲調査を続ける予定である。

文　　献

(1)　小島　博・浜崎　晃・谷本尚則，放流クロアワビの漁獲調査，昭和58年度徳島水試事報，40 ～ 41 (1985).